

『玄輿日記』が記す「かみの關」地点とはどこか(1596年豊後地震)

松崎伸一・川崎真治・荻山和樹(四国電力株), 西谷淳(株四電技術コンサルタント), 土屋悟(株ユニック)

§ 1. はじめに

1596年豊後地震について書き留められた史料のひとつに『玄輿日記』がある。これは、阿蘇惟賢(黒斎玄輿)が鹿児島から京都までの道中を記録したものであり、その中で「さかの關迄御着被成候。去七月十二日之地震之時。かみの關と申浦里は。大波にひかれて家かまともなし。いのちを失なふもの數をしらす。哀なる事ともなり。」と記している。

この「かみの關」地点について松岡・他(2010)は、周防国上関であるとして、「この記事によって、豊後地震津波が広域に渡る被害を及ぼす災害であったことが明らかとなる」と述べている。

一方、羽鳥(1985)は、「かみの關」を旧一尺屋村(現大分市)上浦(以下、一尺屋上浦)と判断している。『玄輿日記』の「かみの關」地点が一体どこを指すのか、文献調査とシミュレーション解析から検討を行った。

§ 2. 文献調査

天保年間(1830-1844)編集の『雉城雑誌』は『玄輿日記』の記述を掲載し、「上ノ關ト云ハ、今ノ上ノ浦ト云地也」と補足している。この「上ノ浦」に該当しそうな地点を探すと、旧佐賀関町(現大分市)上浦(以下、佐賀関上浦)、一尺屋上浦、佐伯市上浦がある。これに周防国上関を加えた4地点が「かみの關」の候補として考えられる。

まず佐伯市上浦の名称は、佐伯藩が領地内の浦里を上浦村・中浦村・下浦村と区分したのに由来し、元禄郷帳(1701)で初めて確認される。それ以前は戸穴村と呼ばれており上関に相当する地名は見受けられない。このため佐伯市上浦は候補から外れる。

次に、『佐賀關史』(1925)によると、佐賀関は「南と北とに天然の良港がある。(中略)南港を通稱して下浦又は下關と稱して居る。(中略)北港の通稱は上浦又は上關とも呼ばれて居る。」とある。さらに17世紀前半の編集と考えられる『豊後國古城蹟并海陸路程』では、一尺屋上浦のことを「壹尺屋東浦」、一尺屋下浦を「壹尺屋南浦」、佐賀関上浦を「上關」、佐賀関下浦を「下關」と区別して表記している。豊後地震と近い時代に、佐賀関上浦が「上關」と表記されていたことを示す史料である。佐賀関は単に関と呼ばれていた時代があるのだが、これに「みやこに向ふ方を上浦と云ひ、その反対を下浦といふ」(『佐賀關史』

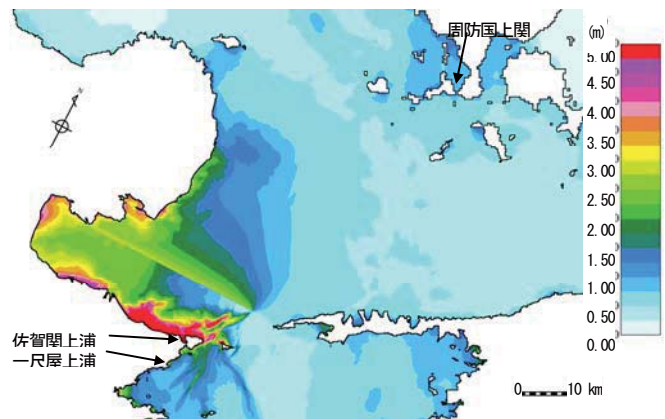
(1925)]という呼び方が相まって、佐賀関に上関・下関という地名が生まれたと推察される。

文献調査の結果より、「かみの關」は、佐賀関上浦の可能性が高いと考えられる。

§ 3. 津波シミュレーション

次に1596年豊後地震津波のシミュレーション解析を実施した。波源は地震本部(2005, 2009)の別府湾一日出生断層帯のモデルを参考に、羽鳥(1985)の痕跡高(14地点)を再現対象として相田(1977)の適合度指標 K, κ を満足するようにすべり量を調整して設定した。その結果を下表・下図に示す。

津波高さ	羽鳥(1985) [痕跡高]	本検討 [シミュレーション]
佐賀関上浦	6~7m	10.4m
一尺屋上浦	4m	5.4m
周防国上関	—	0.9m



さらに、当時の潮汐変化を考慮すると最大水面高さはT.P.+1.7m程度となる。地盤高さを仮にT.P.+1mとすると浸水高さは0.7mであり、羽鳥(1985)が「家屋の流失した地点では、浸水面が地上から1.5~2m」としているが、周防国上関では家屋を流出するような津波ではなかったと評価される。

§ 4. まとめ

『玄輿日記』が記す「かみの關」は、佐賀関上浦を指すものと考えられる。そして、豊後地震津波は中国・四国地方にも達してはいるものの、津波被害が特に大きかった地域は、シミュレーション結果から別府湾沿岸に限定されていたと推察される。